

三 九州地上決戦の計畫（附圖參照）

第二總軍司令官は編成早々の一九四五年五月初め頃以上の判断と作戦準備の實情とを勘案し又第一章第八節の大本營の本土決戦計畫を基礎として九州方面に於ける決戦計畫を決定し之を第十六方面軍司令官、第十五方面軍司令官に指示した。其後情勢の推移と兵備の進捗と作戦方式の検討に伴つて此の計畫を補修した。第十六方面軍司令官は既に第二總軍が設置せられる以前に大本營から本土決戦計畫を内示せられて居たので九州決戦の計畫を概定し茲、指揮下各兵團に之を示して居つたが第二總軍の計畫を受領するや所要の修正を加へ又情勢の推移に伴ひその補修を行つた。

(1) 一般要領

(A) 九州方面を西部日本（鈴鹿山系以西）に於ける最も重要なる決

戦場と決定し九州内に於ては南部九州及び北部九州を主力を以て決戦を求めぬ地域と決定する。

南部九州の決戦に當つては四國特は南部四國との作戦の聯絡性を重視する。

(B) 決戦に當つては陸軍、海軍、陸海航空部隊渾然一體となり之に九州官民の總力を加へ、決戦場に其の戦力を結集發揮し果敢なる攻勢を以て米上陸軍主力を迅速に撃滅する。

海上部隊及び陸海軍航空部隊は先づ上陸海岸に近迫して來る米軍船団を洋上に攻撃撃滅する。地上部隊は上陸し來る米軍の上陸未完の間に攻勢を斷行し之を海岸地域に撃滅する。官民は軍の後方諸勤務や陣地構築を援助する外其の一部は戦闘部隊に協力して「ゲリラ」戦闘を實施する。

佐世保留守司令部初め九州の海軍基地、陸海航空基地の諸部隊長は陸軍及び其の準備に關し第十六方面軍司令官の指揮を受け

又佐世保鎮守府司令官は陸軍兵器の緊急製造、艦砲の陸軍轉用  
高角砲の融通等につき馬十六方面軍に協力する。

⑥米軍の九州侵寇は七月以降急起するものと豫期し、之に對する  
作戰指導の時期的要害を七月迄を第一期、九月迄を第二期、十  
月以降を第三期と區分し何時でも決戦に應ぜらるる態勢を以て  
作戰準備を進め、作戰準備は第二期末迄に完璧し其の後之を  
補強補充する。

又第二期迄の作戰準備未完の時期に米軍が上陸して來た場合は  
過早に戦力を消耗しない様に當初は海岸に於ける花々しい決戦  
方式を避け持久戦的な作戰を實施す。第三期以降に決戦か起さ  
る場合に於ては當初から果敢なる決戦方式をとる。

⑦地上兵力の配備及び決戦の一般要領は米軍の上陸を豫想する沿  
岸特に主力の上陸を豫想する南部九州の宮崎平地、有明海、陸  
軍半島西海岸及び北部九州の關門、西面西方地區の正西に有力

なる沿岸配備兵團を配備する。此の兵團は砲艦隊に對抗し得る  
堅固で而も大なる縱深の洞窟、坑道陣地を以て固め濃密なる火  
網を水際から陣前陣内に亘つて準備する。

決戦兵團は南部九州に於ては伊勢山周邊に、北部九州に於ては  
久留米平地に集結し何時でも北東に決戦方面に進出し得る標準  
編しつゝ豫定攻勢地區の攻襲の爲訓練や訓練を實施する。

米軍の上陸時、方面が豫想し得る様にすれば決戦方面を南部  
九州か北部九州かに概定し其の後方地區に決戦兵團の機動を開  
始する。

米軍が上陸を開始せんとするは至れば其の主力上陸正面を主  
力か一部か不明の場合に南部九州に於ては志布志灣正面北部九  
州に於ては福門地區を自主的に決戦正面として決定し決戦兵團  
を決戦場に機動し展開する。

米軍が上陸を開始せば沿岸配備兵團を以て米軍を沿岸に撃碎し

橋頭堡の構成を阻止拘束し、決戦兵團を以て沿岸配備兵団を維持しつづめる戦勢を利用し米軍上陸未完の間に攻勢を断行する。此の攻勢は米軍上陸開始後南都九州決戦の場合十日以内一後に一週間以内に短縮された一に北都九州決戦の場合二週間以内に決行する、之が爲本州方面からの増援兵團は此の最初の攻勢に参加を期待しない。

④重要決戦以外の正面は兵備の逸材と重要決戦正面の配備充實に伴ふて戦備を強化する種島、五島、壹岐、對馬、天草等の離島は早晚交通杜絶することを豫期し所要の兵力と軍需品を急速に配備する決戦以外の正面及離島に米軍が上陸して来た場合は沿岸配備兵團(部隊)離島守備隊は豫め堅固に構築された陣地帯を利用し戦強なる持久戦闘方式を以て沿岸或は島の要城を確保し米軍の空海基地の推進を妨害し主力の決戦遂行を容易にする。⑤作戦準備及び作戦は米空軍及び米艦隊の大規模且組織的な破壊

五〇

五一

か行はれることを前提として計畫と準備を進め又實施する。之が爲には土木築城を最も重視し九州全要城を洞窟或は坑道陣地帯とする。兵力、軍需品、軍事施設は凡て此の洞窟と坑道内に分散、秘匿し、又部隊の行動は夜間の利用と徒步行軍とを立前とする。陣地は小部隊に至る迄長期間獨立して戦闘し得る様に、陣地の強度や編成や配備を決定し軍需品や水や衛生施設を陣地内に完備する。

決戦兵團は沿岸の米軍に向ふ攻撃間米軍の砲撃に暴露しない様に豫め展開地區から水際に至る迄全攻撃地區に攻撃築城を準備する。

④ 決六號作戰を米軍の豫想上陸正面に應じ次の様に區分し呼稱することとした。

備考	作戰區分				米軍の上陸正面
	第三號	陸作 第一號	陸作 第一號	陸作 第一號	
16HA を陸部隊と略稱して居た	と號作戰	へ號作戰	ほ號作戰	に號作戰	ろ號作戰
	州九中	州九北	州九南		
	豊後水道方面	天草方面	唐津・佐世保間の地區	下関・前原間の地區	薩摩半島
				有明灣	宮崎平地

(2) 南部九州決戦計畫の概要

南部九州の決戦は米軍の上陸正面を宮崎平地、有明灣、薩摩半島西海岸正面と判断し 57A (25D) 86D 154D 156D 212D 98B<sub>s</sub> 109B<sub>s</sub> 5TkB<sub>s</sub> 1聯 (6TkB<sub>s</sub>) が宮崎平地と大

五二

隅半島の作戰を 40A (77D) 146D 206D 303D 125B<sub>s</sub> 6TkB<sub>s</sub> (主力) が薩摩半島の作戰を夫々 57A の任務は宮崎平地及び有明灣正面に來攻する米軍の撃滅と米軍の鹿兒島灣口突破阻止、種子島の守備とであつた。40A の任務は薩摩半島に來攻する米軍の撃滅と米軍の鹿兒島灣口、黒瀬戸突破の阻止とであつた。

此の三方面に對する決戦は霧島山を中核とし此の周邊に方面軍直轄若は軍の總指揮下に在る決戦兵團を集結し是を決戦方面に投入し構成する仕組みであつた。宮崎平地には四本の道路を有明灣方面には三本の道路を薩摩半島には二本の道路を夫々準備した。霧島山周邊に集結された決戦兵團は 25D 77D 216D 4TkB<sub>s</sub> 5TkB<sub>s</sub> 6TkB<sub>s</sub> 等であつた 57D は北部九州から轉用せられる豫定であつた。本州方面から増援せらるる豫定の二個師團は之を決戦正面に投入するか他の方面に使用するかは當時の状況に即應して決定することとした。

一九四五年四月の計畫に於ては宮崎平地を三正面の中最も重要な決戦場と豫定して居たが七月米軍が宮崎平地と有明灣の兩正面に來攻し其の主力の判定が困難なる場合は有明灣正面を自主的に決戦正面とすることに變更した。其の理由は第一節の米軍の攻撃に關する判斷に記述した根拠に因るものである。

尙兩正面共地形を考慮し米軍の主力の上陸地點を判斷し豫め宮崎平地に於ては住吉海岸地區有明灣方面に於ては菱田川兩岸地區薩摩半島に於ては次上濱地區を夫々主攻勢正面と概定した。

是は攻勢準備と指揮の徹底と攻勢の主動と迅速なる開始を期する爲である。

薩摩半島正面に對しても状況に依り攻勢を探ることを豫期して居たが三正面に米軍が併行的に上陸して來た場合の決戦方面の選定に就ては十分検討を盡くされて居なかつた。

鹿兒島灣口の防備は特に重視し之が封鎖のため佐世保鎮守府司令長

五四

官は陸砲を轉用し又機雷を布設して灣口の封鎖を強化し第十六方面軍司令官も亦之に協力して大隅半島及薩摩半島灣口正面の陸上配備を增強した。然し乍ら以上の措置は米軍の突破を完全に封鎖する確信に到達し得なかつたので七月頃鹿兒島灣内の海岸特に大隅半島西

五五

(A) 宮崎平地の決戦指導

沿岸配備兵團を夫々北部、中部、南部宮崎平地の海岸要域に逐次配備し其の砲兵と水際陣地の火器と沿岸に配備し其の側防洞窟砲兵とに依り上陸米軍に對し水際地域に於て打撃を與へ其の橋頭堡の達成を阻止す。

此の間に島山周囲に集結しある決戦兵團

25D  
77D  
216D  
57D  
4TkB<sup>g</sup>  
5TkB<sup>g</sup>

を四本の

道時を利用し本庄、裏の地區に推進し概ね佐土原町、瓜生野の線に展開し住吉海岸に向ひ攻勢を謀る

57A

の攻勢開始は米軍上陸開始後一週間以内に断行する様計畫した之が爲決戦兵團の一部例へば

北九州より到着する57Dの到着を待つことなく攻勢を断行し之を第二線兵團として使用することがある。又本庄、妻の地區に集結することなく一帯に展開地區に進出せしめ、野戦重砲部隊及び戦車旅團の一部は事前に豫定陣地に就けて置く。

尙主攻勢方向を豫め住吉正面に概定したのは地勢上米軍が此の正面に上陸して来る算が多いと判断せられ而も我が攻勢に有利なことを考慮し短期間に攻勢準備を完了し、主動的に進出、單純、的確、徹底した會戦指導を實施しようとする意圖に出たものである。本州方面から増援せらるる豫定の二個師團は宮崎平地に第二次攻勢兵團として使用するか或は有明灣、薩摩半島方面に使用するか其の決定を保留した。

此の決戦間有明灣、薩摩半島方面の米上陸軍に對しては概ね所在兵力を以て先づ持久を策す。都城地區或は鹿江地區飛行場基地群に對する米空輸兵團の攻撃を豫期し一部の兵力を配置し堅固なる

獨立性陣地に據らせ之に備へる。

(四) 有明灣方面の決戦指導

沿岸配備兵團86Dを夫々有明灣正面及び大隅半島海岸要域に又鹿江地區には海軍部隊二万名鹿江西方鹿兒島灣正面と泊津正面には夫々徵發混成旅團(八月頃の豫定)を配備し是等の沿岸配備兵團は宮崎平野と同一の要領で戦断せしめる。

此の南霧島山周邊地區に集結しある決戦兵團 25D 77D 57D 21eD 4TkB 5TkB を概ね岩川町南方地區に推進し菱田川兩岸地區より攻勢を採り此の正面の米軍を撃破したる後其の全力又は一部を以て鹿江飛行場基地、或は鹿兒島灣を突破し此の基地に向ひ攻撃して来る米軍を求めて攻撃する 25D 77D を先づ沿岸配備兵團に増加し沿岸要域の確保を確實にすることがある。此の攻勢開始も米軍上陸開始後八日以内

に断行する如く計畫された。

陸軍半島の決戦指導

其の決戦指導の要領は沿岸配備兵團  
北方、加世田知覽、海開ヶ岳正面に  
陸軍を沿岸に撃破拘束する、主攻勢  
山周邊に集結しある決戦兵團  
地区より逐次會戦加入の態勢を以て  
神速に吹上濱方向に攻勢をと

(3) 北部九州の決戦計畫

北部九州の決戦は米軍の上陸正面を  
福門地区と博多灣正面とに豫期  
した。  
北部九州の決戦を  
56A ( 57D  
145D 312D 351D 4TKB  
46TKB 壹岐要守大  
19大守大  
下關要守大  
13大 ) をして擔當せしめ其の  
任務は北九州に來攻する米軍の撃滅と  
關門水陸連絡路の確保であつた。  
其の指導要領は沿岸配備兵團  
地区、福門地区、福岡、前原の地区、  
唐津、伊万里、佐賀の地区に

五八

配備し、米軍主力が福門正面に上陸して  
來る場合は決戦兵團 ( 本州  
方面から來發する 230D 南部九州より  
轉用する 212D 216D 206D 77D 25D  
5TKB ) の主力を  
飯塚周邊、一部を北部博多平地に推  
進し南北兩方面より求心的に攻  
勢を斷行する。  
米軍主力が博多灣に上陸して來る  
場合は決戦兵團の主力を東部博多  
平地に、一部を南部博多平地に推  
進し博多灣岸に向ひ攻勢を斷行す  
る

五九

此の攻勢開始は攻勢兵團集結の關係  
上米軍上陸開始後二週間以内と  
豫定す其の戦闘要領は概ね南部九  
州の場合に準ずる。此の決戦間他  
の正面より久留米、佐賀平地に突  
進を企圖する米軍に對し所在兵力  
を以て持久を策する。

(4) 五月以降の作戰準備の進捗状況

九州方面決戦の中核となるべき第  
二次兵備の 206D 212D 216D  
は四月上旬動員を下令せられたが  
其の編成完結は五月下旬から六月  
月上旬に亘つた。

五月には 56A 司令部の新設を見六月は 40A 司令部か臺灣より轉進して來た。九州方面に配備せらるる豫定の第三次兵備兵團 303D 312D 351D 118Bs 122Bs 125Bs 126Bs は七月末から八月上旬に亘つて概ね編成を終つた。然し乍ら第三次兵備の兵團は將兵の素質、指揮官の能力、裝備特に機動力と火力裝備著しく劣り主の戦力登壇は十月以降でなければ期待出來ない實情に在つた。

第二總軍は最も重要な決戦を豫期する九州に比較的精選な第二次兵備兵團及び滿洲(25D) 北海道(57D) 方面より轉用せる兵團を充當し、第十六方面軍亦配當兵團の中南部(77D) 九州に精選兵團を配備する様に考慮した。又大本營は六月東部日本の作戰準備を一部犠牲とし、九州及四國方面に對し優先的に兵備、兵器、資材、軍需品を交付する如く緊急措置を講じた。

以上の措置に依つて諸兵團は八月初め頃の項決戦計畫に即應する配備を概ね了つた。

築城、交通、通信、兵站等の諸準備は七月末歐行的な缺陥はあつたが部隊の異常な努力と國民の協力とに依つて概ねの域に達し十月末には概ね計畫の如く完成し得る確信を得た。七月初め及び終戦時の九州に於ける決戦用軍需品の集積状況は次表の通りである。





備考	
1. SZ	特攻戦隊
ZG	突撃部隊
S <sup>c</sup>	震洋
H <sup>t</sup>	回天
M <sup>s</sup>	蛟龍回龍
S	水雷戦隊
2. S <sup>c</sup> 0, H <sup>t</sup> 0, M <sup>s</sup> 0 基地ヲ 設定シ未ダ舟艇ヲ配備シ非ラザ ルモノ	

九州方面陸軍決戦作戦用軍需品集積状況

種別	集積		計		摘要
	四月上旬	六月下旬	八月初旬		
彈藥	二ヶ師團 三ヶ月作戦分	十二ヶ師團 三ヶ月作戦分	十二ヶ師團 三ヶ月作戦分		九州の全兵團に割當ると一ヶ師團一五ヶ月分となる 但し四月上旬には北九州に全陸軍用一五ヶ師團を保有しありたり
一般燃料	ナシ	七七五〇坪	七七五〇坪		四月上旬には全陸軍用として陸軍管轄九州に是等の軍需品を保有して居た
糧秣	ナシ	二二〇〇万人 馬五万頭分	八二九四万人 馬八万八千頭分		
衛生材料	ナシ	一一六〇万人分	一一六〇万人分		
醫藥材料	ナシ	三三三〇万人分	三三三〇万人分		

備考  
一 南部九州と北部九州の集積比重は約80対20であつた  
二 兵器、彈藥の一部は本表の外九州の工場施設を利用して現地生産に努めて居た  
三 本表の數字の外作戦準備用補給品別に實施する  
四 本表八月初旬分以上に決戦用として集積する軍需品の積定は殆んど無かつた  
五 従て七月以降増勢された兵力に對し別面に軍需品を集積することは出来なかつた

但し、教育、訓練は築城其他の準備に忙殺せられた爲七月末頃には  
六三  
末に見るべきものが無かつた。又作戦思想の統一と普及は未だ不十分であつた。十月頃には對米軍上陸防禦の戦技を一通り訓練を終る  
様各兵に長に強く要望された。  
十一月頃は九州各部隊の作戦準備が完成し戦力が高潮に達すること  
とが豫期された。  
九州官民の決戦意識も七月頃より高潮し國民義勇隊、國民戦闘義勇隊等の組織に着手し其の戦力を決戦に寄與させる準備が軌道に乗つて來た。

(四)九州方面航空作戦の計畫

九州方面、航空作戦の計畫は七月陸海軍航空作戦に關する中央の協定が成立し、本土の航空作戦準備の重點を西海日本及南洋方面に指向せらるるに及んで航空編成司令部、海軍總隊間、第六航空軍、第五航空艦

隊間に夫々協定し其の作戰計畫が確立するに至つた。  
(1) 陸海軍中央協定の骨子

(A) 方針

陸海軍全航空戦力を統合發遣して米軍を本土來攻の初動に於て成  
可く至短期間に之を洋上に捕提撃滅する。  
又本土の防空及び潜水艦に對する作戦を強化する。

(B) 作戰指導の大綱

(A) 米上陸軍に對する作戰指導

主として特攻攻撃戦法を以て米軍上陸船團を撃滅する。之か爲  
先づ九州、四國、兩洋に作戰準備の重點を指向し之を概成する  
其の後之を増強すると共に他の方面特に關東地方の作戰準備  
を進める米軍上陸企圖を早期に看破する爲米軍の進攻基地及び  
其の作戰基線に對する策敵を周密に實施する。  
米軍上陸船團に對する攻撃は概ね十日間程度の期間特に船團の

泊地進入前後に最大戦力を投入し晝夜に亘り果敢、執拗なる奇  
襲、強襲を反覆し其の撃滅に努める。

米機動艦隊に對しては好機を捉へ攻撃し米上陸船團に對する有  
效なる支援を阻止する。

地上作戰協力は第二義とし當時の戦力之を許せば一部の兵力を  
以て上陸前後に上陸軍の支援砲撃に任ずる米艦艇を攻撃する。

米軍か本土上陸に先後して五島、種ヶ島、伊豆七島等の攻略を  
實施する場合之に指向する戦力は米軍の本土に對する眞面目な  
る上陸を破壊するのを主眼として律する

南朝鮮及び濟州島に對し米軍が上陸作戰を實施する場合は所要  
の兵力を指向して其の企圖の破壊に努める。

(B) 決戦作戰生起迄の防空及び潜水艦に對する作戰要領

陸軍は其の航空戦力を統合し本土に對する米空軍特に其の大形  
機に對し激撃作戦を實施する。

海軍は之に協力する

陸海空軍協力して米空軍大型機の重要基地特に「マリアナ」硫黄島及び沖縄方面の基地を奇襲する。

海軍は日本海方面の米潜水艦に對する作戦を強化し米潜水艦の進入阻止と掃蕩に努める。

陸海空軍協力して本土主要港灣に對する米空軍の機雷封鎖企圖を制壓する如く努力する。

(9) 米軍が本土來攻前に南西諸島・小笠原諸島に基地を擴大し或は中支方面に進攻する場合は一部の兵力を指向し米戦力の減耗に努め其の進攻を遲滞させる事を努める。

(9) 兵力配備並運用計畫の大綱

前記計畫に基く兵力配備と其の運用の大綱は次表の通りである。

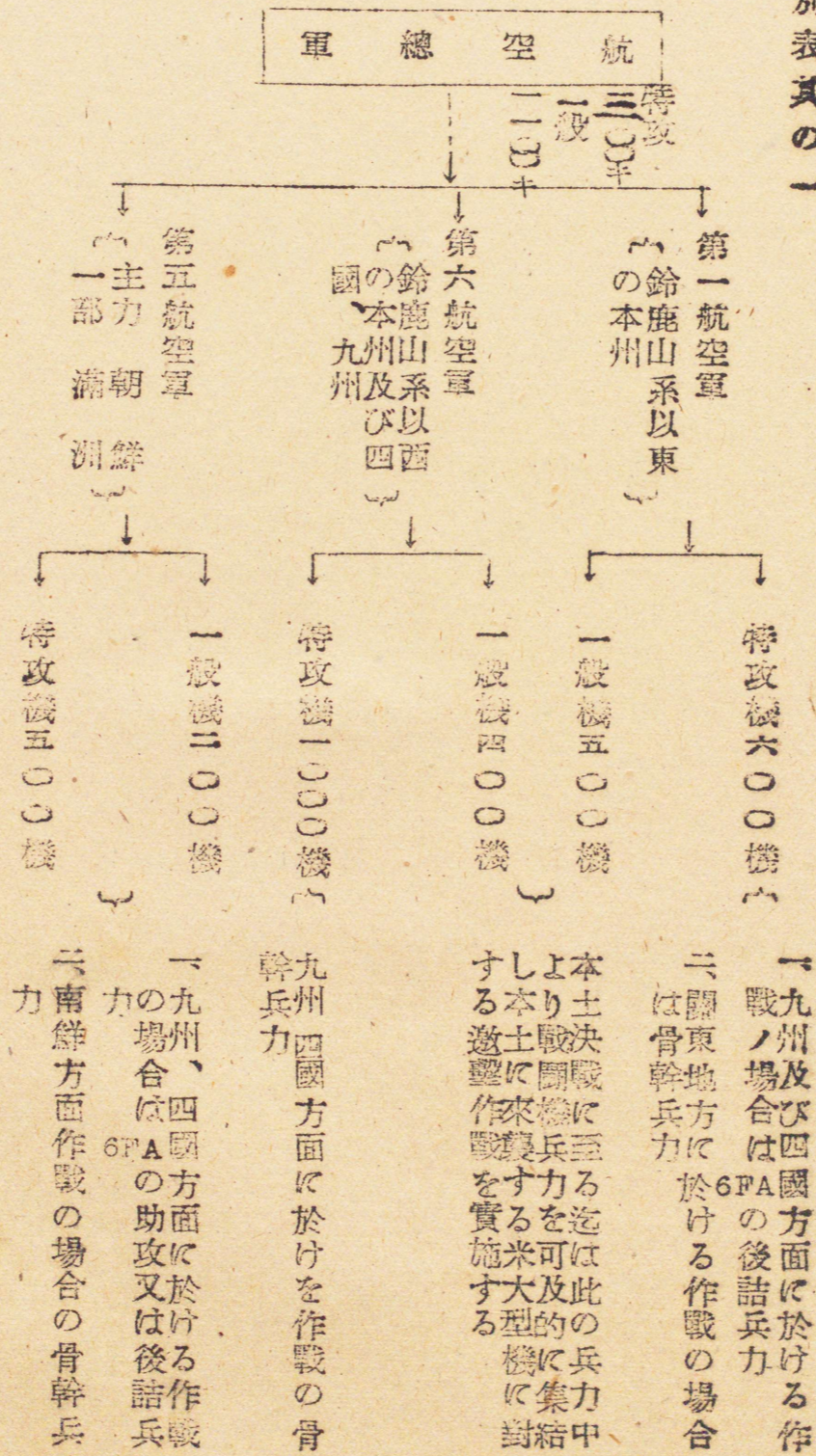
陸軍航空兵力配備並運用計畫 別表其の一  
海軍航空兵力配備並運用計畫 別表其の二

陸軍航空兵力配置の運用計画

別表其の一

備考

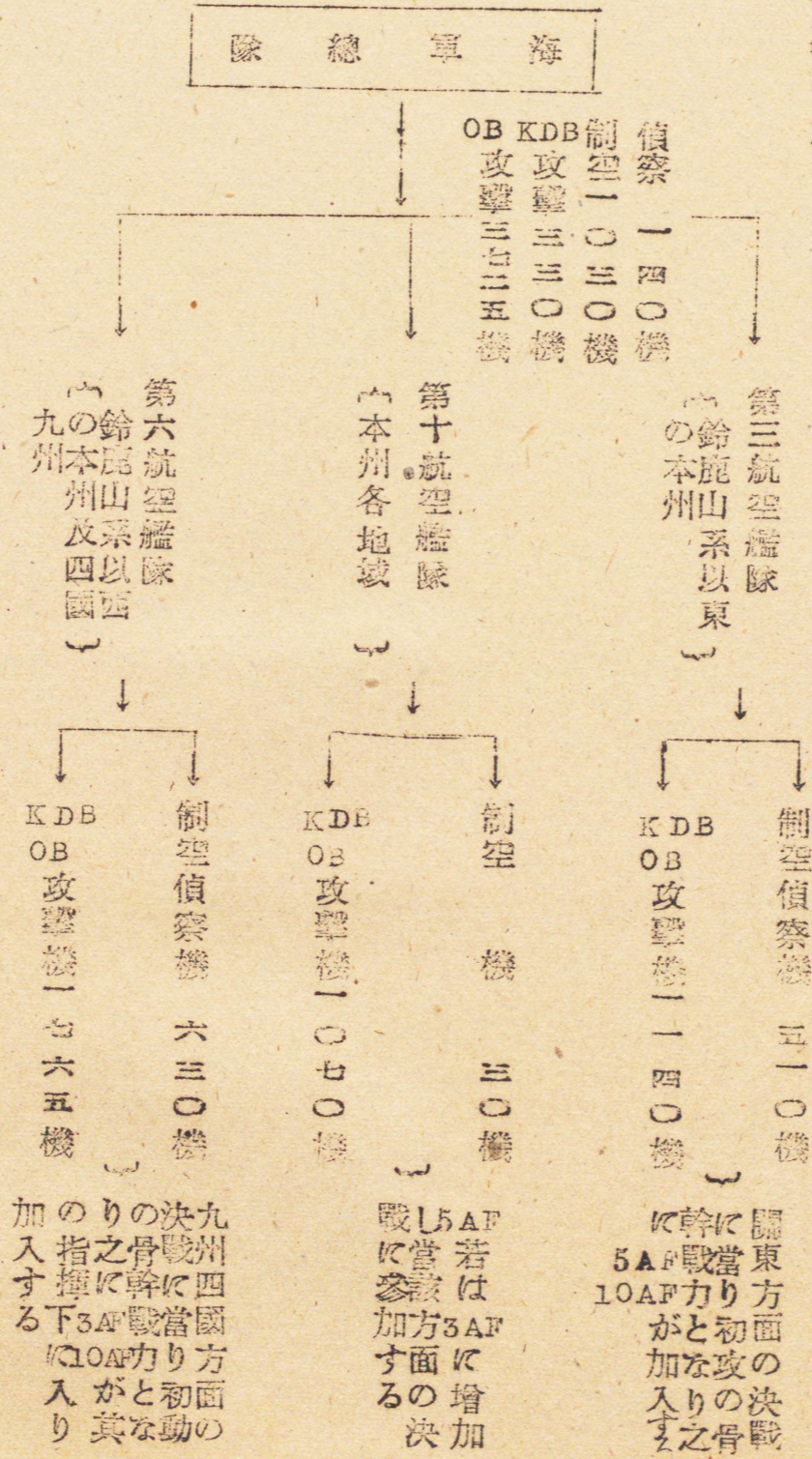
本表兵力以外に七、八月間に特攻機五〇〇乃至一〇〇〇機整備の予定



海軍航空兵力の配置と運用計画

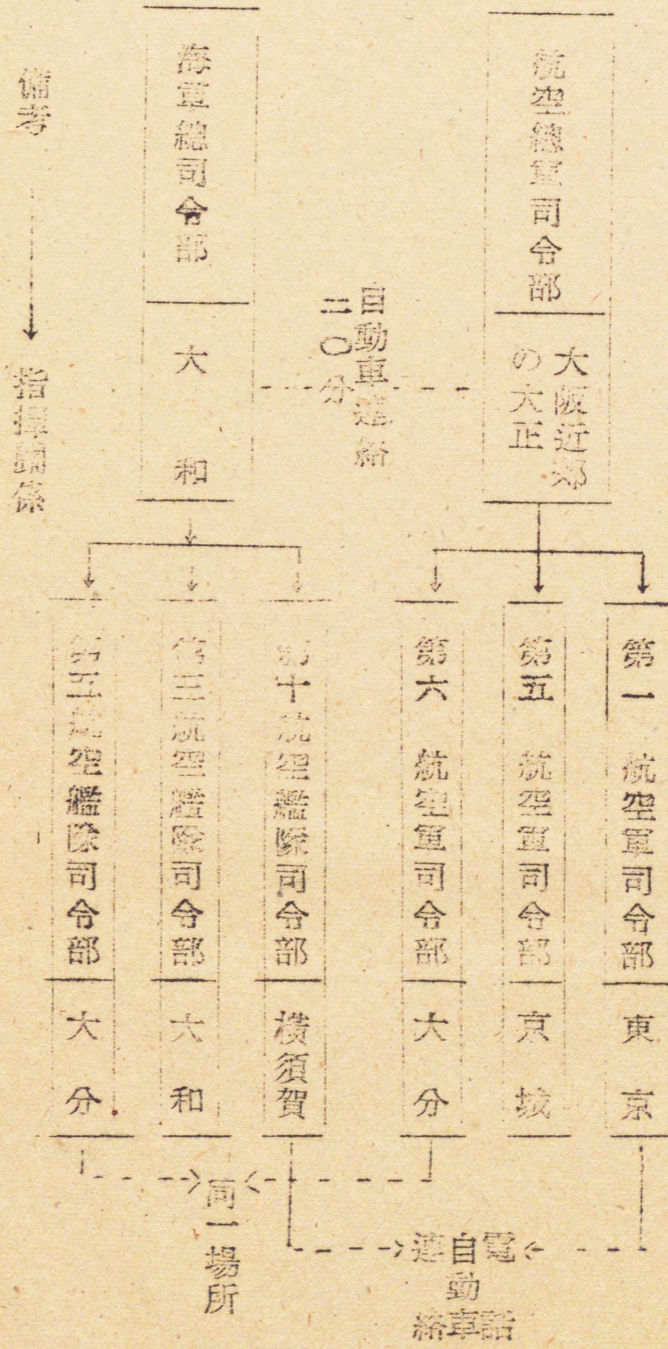
別表其の二

備考 決戦に當つては 5AF 長官が決戦方面全航空部隊を指揮する予定であつた。



(D) 指揮關係

陸海軍協同作戰を立前とし協同を緊密ならしむる爲作戰間陸海軍航空部隊の指揮官は次の様に同一場所又は至近の距離に位置する



(C) 中央協定に基く九州方面航空作戰の構想

(A) 決戦方面を南部九州沿岸に予期し米軍の來攻に當つては航空全戦力を特攻戦法を以て米上陸船団を泊地進入の前後に海上に於て撃砕する

其の作戰準備は九月末に完整する

(B) 索敵要領

偵察飛行隊と潜水艦とを以て比島、沖縄、「マリヤナ」進攻基地より九州、四國に向ふ連絡海面を哨戒す、遠距離及夜間偵察は海軍部隊が擔任し近距離偵察は陸海軍兩部隊が實施する、其の部署は南方諸島、臺灣、南印方面の航空基地よりの飛行機及潜水艦を以て米軍進攻基地に遠距離外洋の偵察を行ひ海軍偵察飛行隊一四〇機及陸軍司令部を以て本土の距岸六〇〇哩圏内を晝夜に亘り搜索す、此の勢力に依り運くも米船團の泊地に入る前日に之を捕捉する

(C) 展開

米航空部隊の攻撃を顧慮し事前損耗を少くする着意と戦機を逸せざる着意とを勘案し特攻隊は發進基地に縦深に秘匿展開する。其の他の部隊は本州、朝鮮、滿洲方面に於て機動を準備する。尙九州決戦に増援すべき海軍の第三、第十航空艦隊及陸軍の第一航空軍は決戦發動と共に逐次九州又は中國、四國方面の攻撃基地に機動し展開する。

(D) 米機動艦隊に對する攻撃

米上陸軍船團に對する攻撃を重視し米機動艦隊に對する攻撃兵力を節約する、従つて米軍の本格的上陸企圖が明かになる迄は特に好機ある場合の外成可く差控える、愈々來攻企圖が明かになれば精銳海軍航空部隊（約三三〇機）と陸軍航空部隊の一部とを以て米機動部隊を攻撃し上陸時の支援能力を奪ふ。

(四) 米輸送船團に對する攻撃

船團が我が攻撃圏内に入るや其の大型輸送船を選び晝夜間斷なく果敢なる奇襲強襲の特攻を加へる、泊地侵入前には比較的優秀なる部隊を充當する。

(四) 米上陸軍艦砲射撃艦艇に對する攻撃 米軍上陸前に於ける米艦砲射撃艦艇に對しては練度優秀なる陸海航空兵力の一部（約二五〇機）を専任し其の勢力の漸減を圖る我が陸上攻勢に當つても此種艦艇に對する攻撃を実施する。地上作戰に對する直接協力は行はない。

(四) 米軍主要航空基地に對する攻撃

上陸船團を最も有効に支援を予想する米空軍陸上基地を一部を以て急襲する米船團の泊地進入前後に於ては最大戦力を投入して總攻撃を実施する、此の攻撃は概ね十日間に全特攻戦力を使用し盡し短期間に戦果を擧げる如く實施する船團攻撃の爲使用する特攻機の數は約四二〇〇機と予定する。



本攻撃間陸海航空の全戦隊は約二〇〇〇機を以て泊地上空の制空を實施する外上陸舟艇に對する銃爆撃をも實施する  
特に沖縄方面の基地に對し約一二〇〇名の空輸艇進部隊に依る強行著陸攻撃を準備する

目九州方面海上作戰計畫の骨子

九州方面に於ける海上作戰の計畫は特攻舟艇部隊を主體とし之に強奪水上部隊（第一章第十節附表日本軍兵力概見表参照）を加ふる戦力を以て計畫された、沖縄失陥に伴ひ七月三日聯合艦隊は水上部隊を本土決戦迄温存する方針を確定し本土決戦時に九州方面を重點とする作戰の計畫を遂次策定し其の準備を急いだ

(一)海上部隊の作戰構想

(A)水雷戦隊の作戰

第三十一水雷戦隊（驅逐艦一九隻）を瀬戸内海伊豫灘北方の島嶼を利用伏せし米船團に對し泊地進入後、航空部隊及特攻舟艇

部隊の攻撃に呼應して攻撃する其の攻撃法は各驅逐艦に特攻舟艇同天を搭載し夜航を以て泊地に近迫し先づ同天を攻撃發進せしめたる後夜戦を以て米輸送船團を攻撃す。

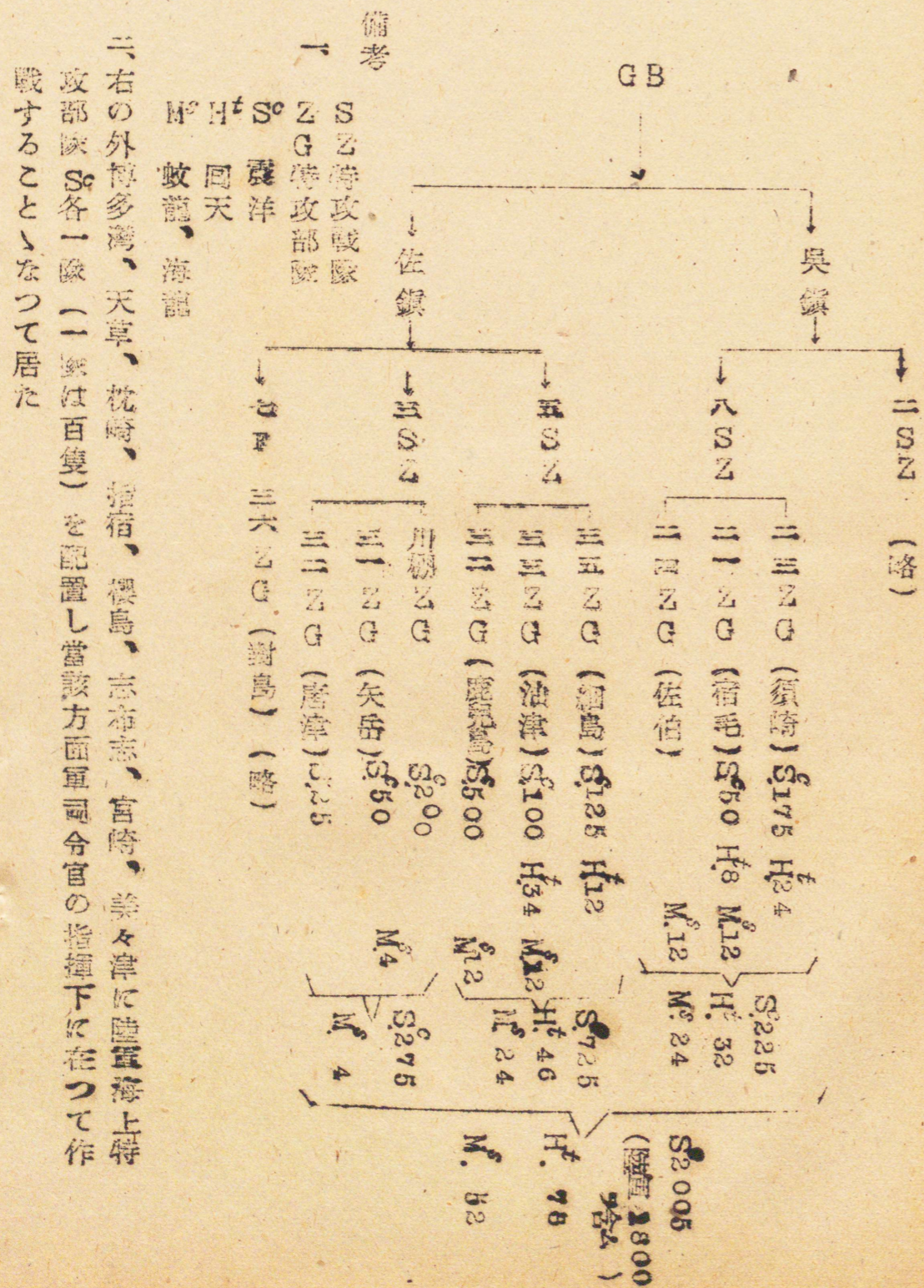
此の水上部隊の作戰行動圖は燃料と一夜行動を考慮し一三〇哩と予定し主として宮崎沿岸に對し有效なる作戰を期待した  
其の他の驅逐艦は海上護衛や燃料の關係上決戦参加が期待し得なかつた。

(B)潜水部隊

大型潜水艦十三隻を以て主として「マーシャル」「マリアナ」比島及沖縄間海域に於て交通破壊作戰に次で決戦時には米軍背後の交通破壊作戰に當らしめ特大型四隻は泊地に在る米艦隊に對し搭載機に依る攻撃を企圖した  
中、小型潜水艦の一部（八隻）は九州の沿岸二〇〇乃至三〇〇哩附近に配して哨戒に就かしめ爾余の主力（十三隻）を瀬戸内

九州決戦に應ずる

海軍上海特攻部隊の編制、配備、兵力



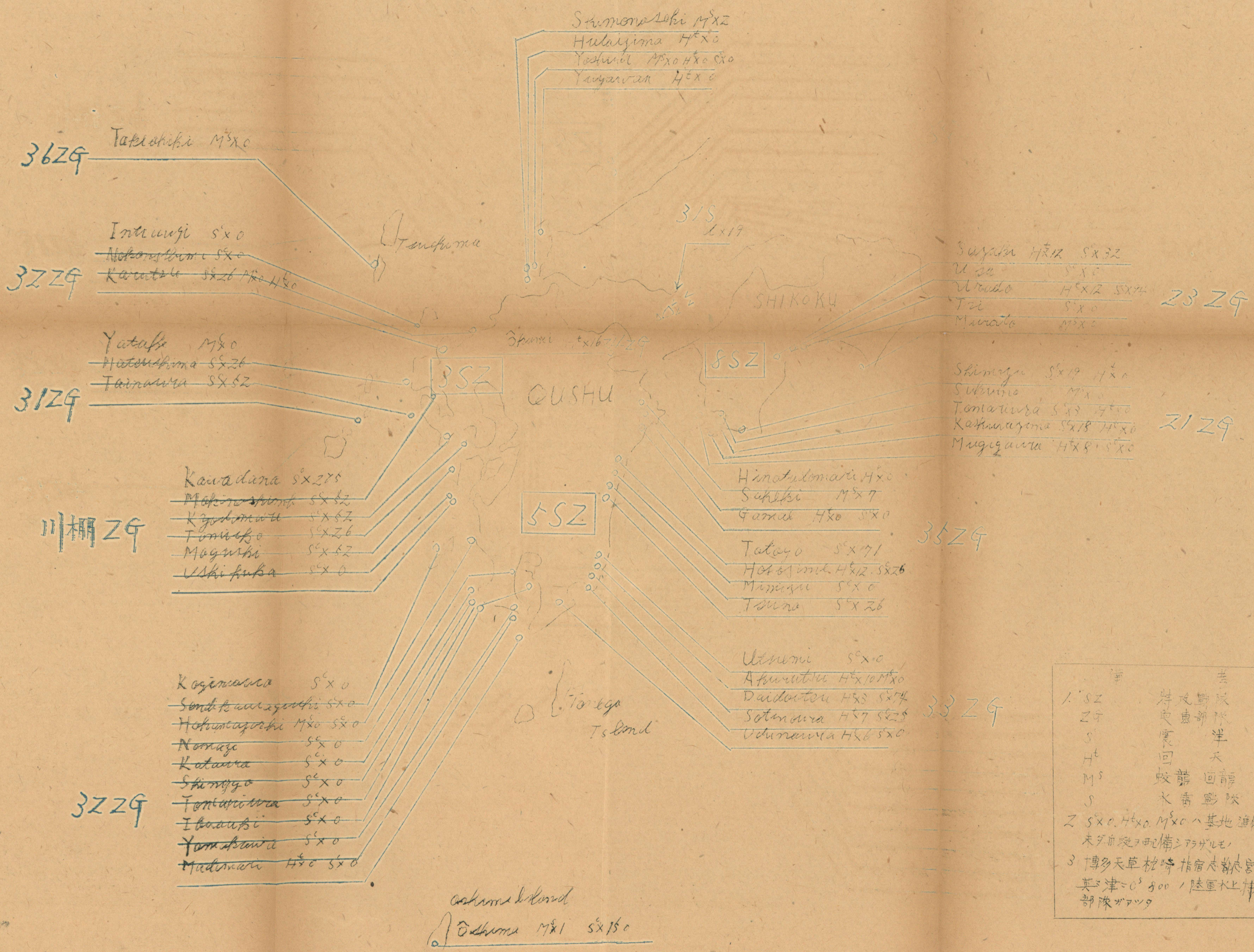
海に待機し米船國來攻を察知と共に戦場へ配備し船団を攻撃せしむる其の後は補給、増援の途断に當らしむ

(9) 其の他の水上部隊の用法  
燃料と損傷の関係上主として重砲防空艦として使用する

(10) 海上特攻部隊の作戦計畫 (要旨参照)  
九州方面の作戦に予定した海上特攻部隊の兵力は第一章第十節附表日本軍兵力概見表の通りであつた其の兵力配備は前部九州特に日向灘、有明海、鹿兒島灣及薩摩半島沿岸を重點とし概ね八月末に展開を終る見込みであつた

其の編成は次表の通りであつた。

備考  
S Z 特攻戦隊  
Z G 特攻部隊  
H<sup>+</sup> 回天  
H<sup>+</sup> 蛟龍、海龍  
二右の外博多灣、天草、枕崎、指宿、櫻島、志布志、宮崎、美々津に陸軍海上特攻部隊 S 各一隊 (一隊は百隻) を配置し當該方面軍司令官の指揮下に在つて作戦することとなつて居た



1. SZ	特設部隊
ZG	支隊
S	震洋
Ht	回天
M <sup>s</sup>	蛟龍回音
S	水雷部隊
2. Sx0, Hx0, Mx0 へ基地通船等未ダ前段ヲ配備シテガレ	
3. 博多天草松崎指宿志都志宮時英津=0 <sup>s</sup> 800 / 陸軍水上特設部隊ガアツ	

海上特攻部隊の作戦要領は奇襲と兵力の同時集中投入の方式に據り米軍船團の泊地進入前後に航空部隊及他の海上部隊の作戦に策應して船團を攻撃する方針とした。

攻撃要領は一般偵察部署の外直協偵察機と沿岸監視所を以て偵察と敵船団発見後の特攻部隊の誘導と通信連絡に當らしむ蚊龍は其の機動力を利用し船團を泊地進入前に攻撃を開始し續いて海龍と共に船團の泊地進入時を捉へて攻撃する。

同天は支援砲撃に任ずる米艦隊を攻撃する外船團を其の入泊時に攻撃する

震洋は船團の入泊時主として夜間攻撃を実施する

此の海上特攻部隊は米空軍の爆撃や砲撃に依る事前損耗を顧慮し岬角や島嶼を利用する洞窟基地に秘匿配置したが事前損耗と機能の故障が相當豫期せねばならなかつた、又機動性に乏しい是等の舟艇が上陸直前に於ける米海空軍の跳梁下に於て幾十%が上陸結

七六

團の泊地に到達集中し得るか未知数の問題であつたが相當大なる損耗が予想された。

七八

第三節 關東防衛作戰（附圖參照）

本節に於ては前節九州防衛作戰と比較し特異の點を主として摘述する。  
（一九四五年五月頃迄の作戰準備の状況）

當時に於ける關東地方の作戰準備の進捗は九州方面に比べ若干進で居たが漸く軌道に乗りつつある状況で作戰戦法の確立、裝備の缺如、訓練の未熟、築城の不備、後方準備の未完等其の實質的内容は極めて貧弱であつた。

(1) 地上戦備の概況

四月中旬に於ては僅かに鹿島灘正面に 44D 九十九里濱正面に 3GD 96Bs、相模灣正面に 84D が夫と配備につき築城を開始しつつあつた。別に 81D 93D 1TKD 4TKD は決戦兵團として中部關東平地と千葉地區に位置し教育、訓練等の作戰準備に努めつつあつた。三月動員を下令せられ鹿島灘正面、九十九里濱正面及相模灣正面に夫と増強せらるる第一次兵備の沿岸配備兵團 151D 152D 140D は編成の途上に在つて裝備未完の儘

五月初頭豫定の配備地域に進出し築城に着手した。

別に北海道方面から 147D が九十九里濱正面に轉用配備せらるることとなつた。そして是等の兵團を統率する四箇の野戦軍があり、鹿島方面の 52A は九十九里濱方面の 53A は相模灣方面の沿岸配備諸兵團を夫と統率して沿岸防備を擔任し 36A は浦和附近に位置して決戦諸兵團を統率して居た 36A 司令部を除く他の軍司令部は編成早々であつて未だ完全に指揮機能が発揮するに至つて居なかつた。第十二方面軍は東京に位置して是等の四軍を統率し關東の防衛に當つて居た。

を固めつつあつた大島及東京灣口の防備

其の他新島、八丈島には夫と 66Bs 67Bs が配備せられ防備は要塞部隊及海軍の封鎖の外陸正面の防備は貧弱であつた。

横須賀鎮守府地區（三浦半島）の防備就中陸戦準備は未だ計畫の域に在つて陸戦に關し第一線軍と鎮守府との間に協調を進めつつあつた。東京灣地區防備の見地に基く房總、三浦兩半島防備組

戦の統一及相模湾正面に於ける作戦に即應する三浦半島の陸軍配  
備に關する第一總軍の希望と横須賀鎮守府管區の防備を主觀とす  
る海軍側の希望の調整等が海軍上努力を要する問題であつた。  
兵團の素質は第一次兵備と其の以後に編成せられた諸兵團は九州  
方面のものと同様低く訓練裝備を完整し戦時兵團として戦力を  
發揮し得るのは數ヶ月後と見込せられた。  
陣地は一九四四年秋以來第三十六軍が擔任し構築中であつた相模  
湾正面は若干進捗して居たが其の他の正面は未だ計畫の域に在つ  
た。

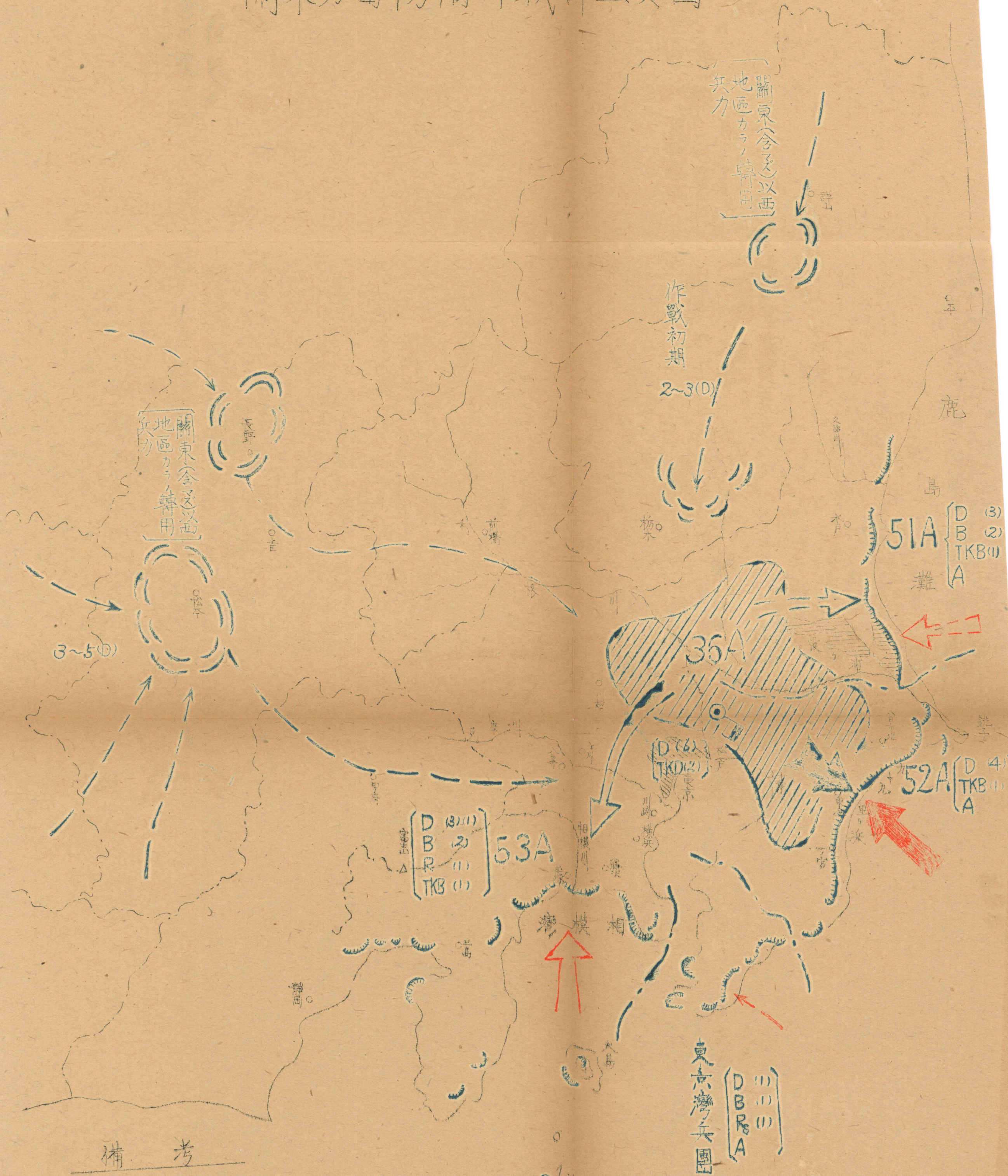
従法其の他兵站準備は九州方面と大同小異であつた。

(2) 航空及海上に戰準備

關東方面の航空作戦準備は九州方面と同様の異因の外一般に米軍  
は先づ西部日本に來攻する算大なりと判断し九州方面來攻に際し  
て關東方面の作戦を豫算すべき第一航空軍、第三、第十航空隊  
三〇

の全力を其の方面に集中する算ありし其の陸軍作戦の準備は大  
なる關心を有して居た對情に在つた。航空隊の進軍等の外九州方面  
に比し更に進んで居た。特に兵站、燃料の整備、燃料彈藥の  
集積は九州方面優先主義のため一時急務となる傾向に在つた。  
三一

# 關東方面防衛作戰計畫要圖



## 備考

- ◻ 司令部
- D 師團
- B 旅團
- TKD(B) 戰車師團(旅團)
- 決戰軍
- ◎ 他方面(轉用)兵力
- ⊕ 陣地
- 作戰地境
- 

油屋島  
三宅島